

卷 頭 言

本年は、平成七年四月、改組転換によって四年制大学として発足、今年三月末に四年の満了を迎える。当然のことながら身延山大学東洋文化研究所も軌を一にしているが、本研究所としては鋭意体系的な研究をすすめるべく諸準備をすすめてきた。その間、『東洋文化研究所報』第一号、第二号を発刊、第一号では、身延山にゆかりの深い波木井実長（法寂院日円）の七百遠忌を記念して特集号を組み、また第二号では、ジェンダーに関する問題を取りあげ、「女人成仏」をテーマとして特集してきた。本号では、本年六月、身延山第十一世行学院日朝の正当第五百遠忌を迎えることに鑑み、日朝に関する論稿を掲載し、その記念号として刊行した。一つは、日朝が日蓮聖人遺文に註釈を加えた『御書見聞』四十四巻の中、『観心本尊抄私記』五巻と『観心本尊抄見聞』三巻を主資料として論考を加えたものである。また二つは、日蓮聖人の伝記を記した『元祖化導記』二巻を主資料として、そこに引用されている宗祖の遺文について考察したものの二点である。

因みに日朝は、字を鏡澄といい、応永二十九年（一四二二）正月五日、伊豆の宇佐見に生をうけたが、幼なくして父を失い、伯父夫婦に養育されていた。永享元年（一四二九）四月八日、八歳の折、一乗坊日出に請われて出家得度、兄弟子日執の薫育を受けて成長した。十九歳の時、当時関東天台の中心として隆盛をきわめていた武蔵国仙波郷（現埼玉県）の無量寿寺（仙波檀林）に赴き、およそ五年間にわたって天台学を修めた。その間、佐渡の霊跡を巡拝、京都にも遊学したが、二十歳の時に三島本覚寺を、そ

して三十八歳の時に鎌倉本覚寺をゆずられ、両寺を兼務した。しかし寺の維持管理を代務者にまかせ、自身は、足利学校において儒学を学び、さらに京都、奈良、比叡山において諸宗の教義を学んだ。特に京都では、本覚寺日住のもとで宗学を修めた。四十一歳、寛正三年（一四六二）に、身延山第十一世に晋まれ、明応九年（一五〇〇）六月二十五日、七十九歳をもって身延山東谷・行学院覚林坊において遷化されるまで、三十八年間にわたって身延山久遠寺の経営に腐心され、発展の基礎を築かれた。室住一妙氏は、日朝の身延在山の期間を（一）身延山経営時代と（二）補施設時代に分け、前者の十九年間は、①信行制度の樹立、②教学の総合研究、③本院の移転拡張工事、④祖書の蒐集謹写と註釈という報恩事業の完遂であったという。

いずれにしても日朝は、大坊を現在地に移転、諸堂の建立・整備などの寺門経営、そして日蓮聖人遺文の蒐集・『録内御書』の書写、『録外御書』の蒐集等々の教学、さらには門弟の教育に尽力されたのである。

最後に、本記念号が日朝上人の顕彰に大いに資し、また当研究所発展充実の一助となるであろうことを記して結びとしたい。

平成十一年二月二十五日

身延山大学東洋文化研究所長

仲 澤 浩 祐 識